

養魚に捧げた人生：22年の試行錯誤

十和田湖に魚を

和井内貞行が官吏として働いていた十輪田鉦山が 1884 年に官営から民営に変わった時、彼は 27 歳でした。公務員ではなく会社員となった和井内は、勤務の傍ら、自ら実業家として養魚事業を始めることを決意しました。当時、十和田湖にはまったく魚がいなかったため、この地域で働く何千人もの鉦夫に健康的なタンパク源を提供したいと考えたのでした。和井内は数種類の魚の稚魚を湖に放流しましたが、どれも定着には至りませんでした。何度も挫折を味わいながらも、和井内は粘り強く挑戦し続けました。

【キャプション（資料左部）】

鯉

日光マス

イワナ

サクラマス

ヒメマス

失敗の連続

1884 年から 1890 年にかけて、和井内は鯉・イワナ・金魚・フナの稚魚を十和田湖に放流しました。そして、初めて鯉の成魚を捕獲した後、1897 年に鉦山の仕事を辞めて養魚業に専念し、小坂や毛馬内に鯉を出荷して販売し始めました。しかし、1899 年に十和田湖の鯉の数が激減してこの事業が失敗に終わったため、和井内はかわりにサケ科の魚（マス、サケなど）の養殖に目を向けました。和井内は、日光で魚類の養殖について学んだ長男の貞時の協力を得て、ここから数キロメートル北の銀山にある古い学校を改造したふ化場で稚魚をふ化させました。1900 年と 1901 年、和井内は大量のサクラマスと日光マスの稚魚を十和田湖に放流しましたが、いずれも成功にいたりませんでした。

偶然に訪れた運命の出会い

1902 年のある日、青森水産試験場を訪れた和井内は、北海道の支笏湖で回帰本能を持つヒメマスの繁殖に成功したという話を偶然耳にしました。和井内はこのチャンスに賭けました。妻の勝と相談し、彼は売れる私財の全てを売り払って資金を調達しました。そして、支笏湖からヒメマスの卵 3 万個を購入し、ふ化させた稚魚を十和田湖に放流したのでした。家計は非常に困窮していたものの、和井内とその妻は、今度こそついに自分たちの努力が報われると確信していました。

【キャプション（資料中央部）】

阿寒湖

1894

支笏湖

1902

十和田湖

ヒメマスの奇跡

それは 1905 年の秋のことでした。稚魚の放流から長い 2 年を経て、ヒメマスの大群が産卵のために十和田湖に帰ってきました。和井内は、27 歳の時に抱いた夢を、血と汗と涙の果てに 47 歳で実現させたのでした：ヒメマスが帰ってくると、地元の漁師たちは 1 日に 1,000 尾ものヒメマスを釣り上げるようになりました。和井内の生涯をかけた挑戦の感動的な物語は、1950 年に映画化されました。

ヒメマス

ヒメマスはサケ科の淡水魚で、火山活動によって北海道の阿寒湖とチミケップ湖に陸封されたベニザケの亜種です。阿寒湖のヒメマスの卵は、まず支笏湖で移植と稚魚の放流が行われ、その後そこから和井内貞行によって十和田湖へと移植されました。ヒメマスには回帰本能、つまり、産卵のために生まれた場所へ戻ってくる習性があります。

パネル 2 枚目「2. 養魚に捧げた人生 ヒメマス回帰までの 22 年」②

養魚成功を語るに欠かせない妻・カツの献身的サポート